近隣住民・大学生と協力し新住民の来街促進につなげる

対象地域
・東武東上線「ふじみ野駅」から車で約10分。
　旧大井町のエリアに位置する。
・商店街名：「亀居中央商店会」
　　「大井ショッピング商店会」

現状と課題（背景）

店主の高齢化と空き店舗の増加と周辺環境の変化による利用者の減少

　亀居中央商店会と大井ショッピング商店会は、高度経済成長期真っ只中の1960年代後半に発足した。
　当時、この地域には工業団地や事業所、それらの企業の社宅があり、商店街は工場やオフィスで働く人々と社宅の住民で大いに賑わっていた。
　1970年代から1990年代の初め頃までは、商店街の大通りを歩行者天国にして夏祭りを盛大に行うなど、地域コミュニティの中でも重要な役割を果たしていた。
　しかし、工場や事業所の撤退が相次いだこと、周辺への大型ショッピングセンターの進出によって徐々に客足は遠のいていった。
　対象地域は人口増加率が高いふじみ野市内でもファミリー層の転入が多いが、住民の多くは車で大型スーパー等へ買物に行くため、商店街を利用する人は少ない。
　新住民の商店街利用を促進するために、商店街へ親しみをもってもらうための取組や、魅力的な個店を増やすことが課題である。

亀居中央商店会（左）、大井ショッピング商店会（右）

ビジョン

商店会、自治会、大学（教員・学生）が一体となった活性化推進体制確立

　現在、両商店会では、店主の平均年齢が70歳以上であることに加えて、ほとんどの店に後継者がいないことによりマンパワー不足が深刻である。
　このため、商店街単独での活性化事業を行いづらい状況にある。
　本プロジェクトでは、地域を良くしたいという思いを持つ住民や、近隣にある文京学院大学が商店街と連携し現状打破のための事業を企画・実施するとともに、持続的な連携体制の構築を目指した。

○商店街の現状
（商店主や住民へのインタビュー等から）

【強み・チャンス】
・地域住民から支持される品質・サービスの高い個店がある。
・個人経営ならではの融通を利かせてくれる個店がある。
・近接する大型スーパーのお客が商店街を併用。
・商店会近隣にファミリー層が増加。
・安心・安全な環境（防犯カメラ、インターロッキング）。

【弱み・脅威】
・商店会としての活動を行う余力がない（高齢化や会員数減少）。
・歩きにくい（歩道が狭い、夜になると暗い）。
・1km圏内に大型スーパーが密集する激戦区。
・住居一体などの理由で貸店舗化されない物件が多い。

事業実施体制

構成員：商店主、近隣自治会の30代～40代の主婦グループ、大学生、大学教授、不動産オーナー、不動産業者、行政・商工団体

イベントチーム
- 主婦グループが中心となって活動。
- 定期的に企画・検討会議を実施。
- 会議で策定された方針を基に商店街や大学生と調整（全体会議も実施）。

空き店舗活用チーム
- 行政と大学生が中心。
- 商店会長の協力のもと、商店会内の不動産所有者と物件使用交渉。
- 空き店舗見学ツアーを実施し、新規出店促進や貸店舗化を図る。

連携チーム
- イベント実施や空き店舗活用を通して、商店街、住民、大学の3者による協力体制が構築された。
- 持続的な商店街活性化活動につなげるために、大学が主体となって次年度以降の自走体制の確立を進めた。
- ワークショップを通して、空き店舗活用などの事業案を検討し、事業の実現に向けて活動中。

主婦グループによる検討会議

大学生による商店街フィールドワーク

事業スケジュール

	ハロウィンイベント	空き店舗活用	まちラボ
６月	主婦グループによる企画検討会議（6月～10月） ↓ 商店街・大学生との全体会議（8月） ↓ イベント開催周知（チラシ、ＳＮＳ）	商店街現状把握フィールドワーク（6月） ↓ 住民アンケート（7月） ↓ 先進地視察（8月） ↓ 空き店舗使用交渉（9月） ↓ イベント開催周知（チラシ、おかめ新聞、ＳＮＳ）	大学主体の商店街活性化チーム立ち上げ検討開始（9月）
10月	イベント実施（10月最終週）	イベントに合わせ空き店舗で駄菓子屋を実施（10月）	
	商店街、住民、大学によるイベント振り返り会（11月第3週）		振り返り会において、大学側から連携チーム立ち上げ構想を説明 ↓ 商店街活性化事業検討ワークショップ開催（１月～３月）
３月	連携チーム正式立ち上げ		

取組内容

地域や大学生のアイデアを活かした取組と持続可能な連携体制の構築

３者共同での企画・運営によるイベント実施、大学生による商店街PR新聞の作成・配布などを通し、関係者の間に協力体制が築かれていった。

その体制を土台として、次年度から大学内に立ち上がる地域活性化研究組織「まちラボ」の活動の中で商店街活性化事業を発展させていく。

(1)ハロウィンイベント

・前年までは町会内の催しとして行っていたハロウィンイベントを商店街エリアに拡大して実施。

・商店街エリアを回遊してもらうために、お菓子を全て集めてゴールした人を対象に福引を実施した。

(2)空き店舗活用企画「駄菓子屋ふみちゃん」

・商店街を訪れる機会の少ない子供たちに、商店街に親しみを持ってもらうために、大学生が企画（事前に周辺住民へのアンケートを実施し、ニーズを把握）。

・先進地視察を通して運営ノウハウを学び、イベント内で一日限定の出店を行った。

(3)「おかめ新聞」の発行

・商店街に馴染みのない住民（新たに転入してきた子育て世代を含む）に、商店街の魅力を伝えるために大学生が取材、執筆を手掛けた。

・フリーペーパーを発行する会社の編集者を招き、勉強会を実施。新聞作成のノウハウを習得。

・住民とともに周辺世帯にポスティングを行った。

(4)連携チームの立ち上げ

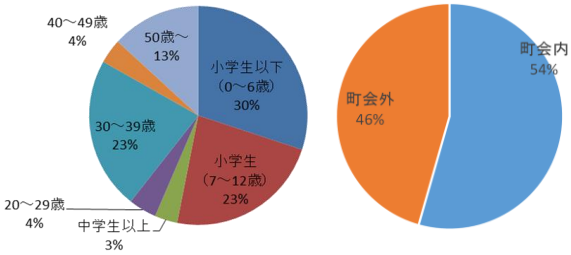
・文京学院大学が立ち上げる地域活性化研究組織「まちラボ（まちづくり研究センター）」内に、商店街活性化チームの立ち上げを調整。

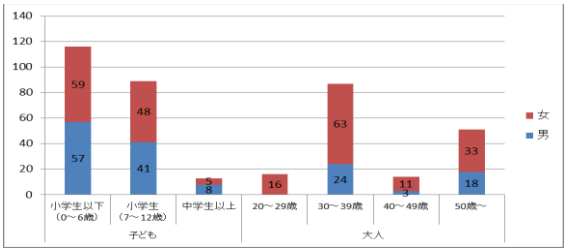
・主婦グループ、周辺自治会、市民活動団体等へ参加を呼びかけ、大学生とともに商店街活性化のためのワークショップを開催した。

ハロウィンイベントは親子連れの来場者で賑わった

駄菓子屋には沢山の子どもたちが訪ねてきた

○ハロウィンイベントアンケート結果





・約半数は主催した町会外から参加。

・20代～30代の親子連れの参加が多かった。

⇩

新住民（ファミリー世帯）の誘客に成功

Q.ハロウィンウォーク全体を通して、何が楽しかったですか？（自由記述）

・子どもが大人の方とコミュニケーションをとりながら、お菓子を集めていることが素敵でした。

・初めての道を通ったり、知らないお店を知ることができたこと。

・子どもばかりでなく、大人も楽しめた。あまり行ってない場所も回ることができて、出会いがあった。

・商店街をめぐるいい機会になった。

⇩

子供だけではなく大人も、住民や商店街の人々とのコミュニケーションや街歩きを楽しめたことが判明

主婦の手によるチラシ（左）と学生が作成したおかめ新聞（中、右）

大学生と住民等による「まちラボ」ワークショップ

成果

主婦グループと大学生が一体となって行動し、関係者の行動を後押しした

(1) 近隣に住みながらも地域とのつながりを十分に持てていない親子が多く参加し、まち歩きと商店主とのふれ合いを楽しみ、商店街や地域に親しみを持つきっかけになった。
　イベント参加人数：３８０人
　→前年度の町会実施時の約４倍が参加
(2) ハロウィンイベントに参加した子供たちに、初めて自分で買物をする体験をしてもらう機会を提供。
　来店者数：２１８人
　→イベント参加者の子ども全員が来店
(3) 新聞作成のための商店主への取材を通して、関係性を築くとともに、近隣住民への配布を通して、商店街と個店の認知度向上に貢献した。
　発行数：２回×1,000部
　→商店街の近隣にあるほぼすべての世帯に直接配布
(4) 共同イベント等の企画や、実施後の振り返りなどを通して、それぞれの地域への思いを共有し、信頼関係を構築していった。
　次年度の活動体制の確立と事業実施に関する意見交換のために、ワークショップを実施。
　連携チーム参加人数：２６人
　→商業者、住民、大学生、高校生、教員、社会福祉協議会などが参加

取組を通じた課題（今後の取組内容）

住民（商店主を含む）に活動へ参加してもらう仕組みづくり

　連携チームには、意欲的でアイデアが豊富な大学生が参加しており、今後の活動において重要な役割を果たすことが期待される。一方、住民の参加が少ないことが課題である。
　今後地域のニーズに見合った事業を展開するために、幅広い世代の住民（これから地域を担っていく子育て世代など）の視点からの意見が必要となる。
　また、商店主は自身の事業が多忙であるために恒常的な参加が困難な状況ではあるが、地域のキーマンとして様々な関係者との橋渡しなどの役割を担ってもらうためにも、より多くの人に参加してもらうことが望ましい。

対応策

・商店街を含めた地域美化活動など、無理なくできる小さなことから、活動を地域に浸透させ、住民のさらなる参加を促す。
・住民・大学生が主体となって事業を企画する際に商店街関係者へ気軽に相談できる関係づくりのため、定期的に交流会（商店街の公園を使ったビアガーデンなど）を実施する。

キーマンのコメント

　私たち文京学院大学はふじみ野市にキャンパスを置き、亀居中央商店会に隣接しています。当プロジェクトには、私がもともとまちづくりの演習を行っており、地域をキャンパスにしたいという考えから参加しました。
　多くの地域で同じことが言えますが、商店会では高齢化が進み、何か行動を起こしたくとも自分たちでは行動が起こせないジレンマに陥っています。そこで学生たちが地域の方々や商店会の人々と一緒にハロウィンイベントを実施できたことは、商店会の賑わいづくりはもちろん、学生たちのやりがいにもつながり、双方にとって大きな成果となりました。こうしていろいろな世代の方々が商店街に関われたことが重要なことであったと実感しています。
　今年度からはまちづくり研究センター（まちラボ）を設立し、引き続きふじみ野市や地域の方々と協力しながら商店街を盛り上げてまいりたいと思います。

文京学院大学 人間学部
コミュニケーション社会学科
教授　中山 智晴 氏

他地域へのアドバイス

　ふじみ野市では、商店会の方々だけではなく、文京学院大学の先生や学生、地域の主婦グループ・周辺自治会・市民活動団体の皆様を巻き込んで当プロジェクトを進めました。 地域の方々との積極的な交流が商店会の活性化を生み、イベントの実施や空き店舗の活用に繋がりました。
　高齢化が進みマンパワーの不足している商店会でも、地域に目を向けて呼びかけることで、地域を巻き込んだ活性化を見込むことができると考えられます。様々な世代を巻き込むことで、効果的な事業が提案される可能性もあります。
　そこで行政、近隣の大学、商工団体などと協力し地域を巻き込むきっかけを作ることも有効だと考えられます。

ふじみ野市PR大使『ふじみん』